

1

二つの絵画について触れた次の文章を読んで、①～⑥に答えなさい。



(葛飾北斎「富嶽三十六景 甲州伊沢 暁」)



(レオナルド・ダ・ヴィンチ「最後の晩餐」)

富士を描いた北斎や広重の版画は、すべてがそうであるわけではないが、しばしば富士の山そのものが画面をはみ出すように大きく描かれている。それについて手前を歩いている人間のほうが米粒のように点描されている。遠近法が逆になっているのである。なぜそうなのか、それが長いあいだの疑問だった。

知られているように、遠近法を発見したのはルネサンスの画家たちだった。たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチの《最後の晩餐》を見ればわかる。手前に描かれるイエスと十二使徒たちの人物像は画面中央に大きく描かれ、それについて窓の向こうに見える自然の景観は、識別しがたいほどに小さくうつすらと浮かび上がっているだけである。そういう画面にくらべるとき、北斎の富士は「逆遠近法」で描かれているとしかいいようのないコウズになっている。なぜ逆遠近法なのか。その永年抱いていた疑問が、足で箱根を越えて富士を仰ぎ見たとき、はじめて氷解していくようだった。圧倒的なスガタで実在しているのは富士のほうで、それにくらべれば自分の存在など芥子粒のごときものとしか意識されなかったからだ。

しかしよくよく考えてみれば、富士を前にしたときのこのような逆遠近法の感覚は、北斎や広重などの江戸時代になってはじめて生みだされたものではないのではないか。それはすでに、万葉人の心のうちにも深く棲みついてきた自然観や信仰に発するものだったのではないかと思う。

たとえばわが国最古のアンソロジーである『万葉集』には、宮廷歌人・山部赤人がうたう「富士山を望める歌」というのが出てくる。

〔天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば……〕〔万葉集』巻3の317

ここで赤人は、富士の山は「高く」「貴い」山であるといっている。そして何よりも、「神さびた」山だ、とうたっているところに注意しよう。この「神さびる」という由緒のある古語は「神のごとくふるまう」という意味をもっている。なぜ、それは「神さびる山」だったのか。

神の降臨する山だったからだ。神話表象ということでは、天孫ニニギノミコトも日向の国、高千穂の添山峯に降臨している。このような伝えは、やがて山そのものを神体とみなす観念を育んだにちがいない。たとえば大和の三輪山や春日山がそうであり、東国の富士山や筑波山がそうだった。あえていえば、日本列島に存在する大小さまざまな山々が、そもそも神々が降臨し鎮座する霊場だったのである。

(注) アンソロジー——詩文の選集。(出典 山折哲雄「世界の中の富士山信仰」)

① ———の部分②、④を漢字に直して楷書で書きなさい。

② 「しばしば」の品詞がどのようにして判断できるかを説明した次の文の [A] [B] [C] に入れるのに適当なことは以下の組み合わせは、(1) (4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

「しばしば」は、[A] 語で活用がなく、文中で [B] を修飾しているため [C] と判断できる。

- | | | | |
|-----|--------|--------|---------|
| (1) | [A] 付属 | [B] 動詞 | [C] 連体詞 |
| (2) | [A] 自立 | [B] 動詞 | [C] 副詞 |
| (3) | [A] 付属 | [B] 名詞 | [C] 副詞 |
| (4) | [A] 自立 | [B] 名詞 | [C] 連体詞 |

③ 「万葉集」の「葉」を行書で次のように書いたときの特徴を、楷書で書いたときと比較して説明したものととして適当なのは、(1) (4)のうちではどれですか。当てはまるものをすべて答えなさい。

葉

- (1) 一点一画がはつきりしている。
 (2) 点画の形や方向が変化している。
 (3) 部首の部分の筆順に変化がある。
 (4) 全体に直線的で丸みがない。

④ 「北斎の……描かれている」とあるが、これは「北斎」の版画が具体的にどのようなように描かれていることを言い表しているか。それを説明した次の文の [] に入れるのに適当なことを、文章中の [] を使って四十字以内で書きなさい。

北斎の版画は、[] ということ。

⑤ 「それは……だった」とあるが、これは「万葉人」についてのどのようなことを述べているか。それを説明した次の文の [] に入れるのに適当なことをばを、文章中から十五字以内で抜き出して書きなさい。

万葉人に、神話に端を発する [] が備わっていたこと。

⑥ この文章の表現の特色とそのねらいを説明したものととして最も適当なのは、(1) (4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) 二つの事物を様々な角度から比較することで、一方の優位性を証明しようとしている。
 (2) 筆者の実体験を一切交えずに書くことで、読者に分析的な理解を促そうとしている。
 (3) 同じ比喩表現を繰り返し用いることで、自らの主張に親しみを感ぜさせようとしている。
 (4) 事例を挙げながら論を展開することで、文章の内容に具体性を持たせようとしている。

次の文章は、叔父が経営する小さな古本屋「森崎書店」に住み込みで働きつつも、本を読む習慣がない「わたし（貴子）」が、なかなか寝付けない夜、部屋に積まれた本から何気なく抜き出した室生犀星の作品を読んでみることにした場面である。これを読んで、①～⑥に答えなさい。

枕もとのランプだけの薄暗い部屋で、布団にもぐったまま、わたしは特にこれといった感慨もなくそれを読み始めた。きつと退屈ですぐに寝てしまおうかと思っていた。

ところが、どうしたことだろう。一時間後には、わたしはその本にすっかり夢中になってしまっていた。文章としては、むずかしい言葉遣いのところもあったが、内容は普遍的な人間の心理がテーマになっていて、それがわたしの心にもすんなりと染みこんできた。

物語は主人公が金沢で過ごした少年時代から、詩人になるという夢を持って上京し、根津で生活をはじめたころのを中心にして書いてあった。そこに、姉や、友人の恋人といった女性への思慕がからむタイトルの「或る少女」というのも、上京後、仕事もないまま貧困の中で喘いでいた主人公が、ふとしたきっかけで知り合う少女のことだった。その少女との交流により、彼の傷だらけの心がほんの一時ではあるものの、癒されていくのだ。

そうした作中でわたしが最も心引かれたのは、複雑な環境で育ち、鬱屈とした青春時代を過ごす主人公を描きながらも、どこか静かな優しさに作品全体が包まれているところだった。その言葉では表せない穏やかな感情が、じんわりと胸に迫ってくる。そう、それは強いというならば、作者の人生への確固たる愛情からなるものに違いなかった。気がつけば、もう夜が白々と明けはじめていた。

それでも、わたしは頁をめくり続けた。翌日、サトル叔父さんがやってくる、興奮冷めやらぬ気分を彼を迎えた。いつもならろくに挨拶さえしないわたしが飛んできたので、叔父は目を丸くする。

「この本、面白かった」とわたしは言った。

すると、どうだ。叔父の顔が途端にパアツと明るくなった。まるで素敵な誕生日プレゼントをもらった子どもみたいに。

「そうだろ、そうだろ？」

叔父は、自分のことのように興奮して言う。

「うん、すつごくよかった。なんていうか、ぐつときた」^④うまい言葉がでてこない自分もどかしかった。「ぐつ」となんて、わたしの心の複雑な動きの説明になど、ちつともなっていない。

「いやあ、うれしいな、貴子ちゃんがそう言ってくれて。しかも、いきなり室生犀星とはまた渋いところを突くなあ」

叔父が本当にうれしそうにしている、わたしまでなんだか釣られてうれしくなってしまう。

わたしたちはそうして、ひとしきりその本について語りあった。いままでもまったく接点のないように思えた人と、ふと一つのこと結びつけることの喜び。それはたとえ相手は叔父のような人でも、いや叔父のような人だからこそ、とても心弾むものだった。

思わぬことが、自分が知らなかった扉を開くということもある。そのときのわたしの気持ちにまさにならなかった。

そう、そのことがきつかけとなり、わたしはほとんど本を読みまくるようになったのだ。いままですつと心の奥で眠っていた読書欲が、ポン！と音を立てて弾けて飛び出て来たみたいな気分だった。

わたしは味わうようにゆつくり一冊一冊を読んでいった。時間はいくらでもあったし、いくら読んでも本がなくなる心配もなかった。

永井荷風、谷崎潤一郎、太宰治、佐藤春夫、芥川龍之介、宇野浩二……名前は知っているけどちゃんと読んだことのない人、名前すら知らなかった人、とにかく面白そうだと思っただけのもの全部手にとつて食欲に読んだ。それでも読みたいものは次から次へと見つかる。こんな素晴らしい体験があるということ、それまでぜんぜん知らなかった。なんだかいままで人生を損してきたような気持ちにさえなる。

わたしは以前のように情眼をむさぼることをもうやめにした。もうその必要も感じなかった。眠りの中に逃げ込む代わりに、叔父と店番を交代すると、自分の部屋か喫茶店で本を読んだ。

古本の中には、わたしの思いもしないたくさんの歴史がまつていた。それは、決して本の中身に関してのことだけではなない。一冊ごとに、長い年月を経た痕跡をわたしはいくつも発見した。

たとえば、梶井基次郎の『ある心の風景』の、ある頁ではこんな箇所に出くわした。

視ること、それはもうなにかなのだ。自分の魂の一部分或いは全部がそれに乗り移ることなのだ。

こんな具合に、かつてその作品を読み感銘を受けた人が、ペンで横に線を引いているのだ。自分も同じくその箇所に感銘を受けたから、知らない誰かと心が通じたよううれしくなった。

ほかにも、押し花の葉が入っているのを発見することもあった。そんなときわたしは、もうとつとくに薄れてしまったその花の匂いを嗅ぎ、これは一体どんな人が、どんな時代に、どんな想いで、ここに挟んだのだろうかと思いを馳せた。

そうした時を越えた出会い、古本でしか決して味わえないものだった。

（出典 八木沢里志「森崎書店の日々」）

① ———の部分④、⑤の漢字の読みを書きなさい。

② 「わたしは……しまっていた」とあるが、「わたし」が時のたつのを忘れてその本に夢中になっていたことを最も端的に表す一文を文中から抜き出し、はじめの五字を書きなさい。

③ 「目を丸くする」とあるが、これと同じような意味で使うことができる慣用句として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) 鳩が豆鉄砲を食ったよう (2) はれものに触るよう
(3) 大船に乗ったよう (4) 奥歯にものが挟まったよう

④ 「うまい……もどかしかった」とあるが、このときの「わたし」の心情の説明として最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

(1) 嫌々始めたはずの読書で思いがけず夢中になってしまった悔しさに見合う言葉が見つからないことへのいらだち。

(2) 何気なく選んだ本がそれなりに面白かったという複雑な状況を説明する言葉が見つからないことへのあきらめ。

(3) あまりの面白さに引き込まれて一気に読み通してしまうほどの感動を表す言葉が見つからないことへのがゆさ。

(4) 一冊の本との出会いで読書の楽しさに目覚めた事実を悟られないようにする言葉が見つからないことへのとまどい。

⑤ 「わたしは……なった」とあるが、店の古本を次々読んでいく中で「わたし」はどういったことを実感しているか。それを説明した次の文の□□に入れるのに適当なことを、文章中のことばを使って五十五字以内で書きなさい。

次々古本を読む中で、□□を実感している。

⑥ 次の文がこの文章の特徴を説明したものになるよう、□□の内容を参考にして、□□に入れるのに適当なことばを条件に従って書きなさい。

条件 二人の登場人物を具体的にあげ、対比させながら書くこと。
この文章は視点が固定された小説であるから、□□という特徴がある。

小説の語りには、視点を固定するかしないかの二つの選択肢がある。視点を固定する小説とは、一人称であれ、三人称であれ、基本的には主人公の視点から書いていくものである。たとえば、Aが主人公の小説では、Aから見た世界が描かれ、Aがどう考えたか、Aがどう感じたかが語られる。視点が登場人物に固定されているので、当然、別の登場人物の内面については想像でしかない。

それに対して、視点を固定しない小説とは、それぞれの登場人物の内側に入り自由で、場面に応じて、A、B、Cそれぞれの視点から見えた世界とその心情が語られる。

（出典 平野啓一郎「小説の読み方」）

3

次の文章は、二〇〇四年に小樽市民会館で行われたシンポジウム「笑いの力」の記録の一部であり、小説家の筒井康隆氏と心理学者の河合隼雄氏が発表者として、工藤左千夫氏の質問に答えている場面である。これを読んで、①～③に答えなさい。

工藤 筒井さんは「悪魔の辞典」をお訳になりましたが、作者のピアスはアメリカ人ですけれども、文化による笑いの違いをお感じになったでしょうか。

筒井 アメリカ人といっても、あのピアスという人はちよつと特殊ですから一般的な評価はできないんですけれども。

工藤 河合さんは世界を飛び回っていらつしゃいますが、文化の違いと笑いについてはどうですか。

河合 アメリカでぼくはよくそういう話をします。「スピーチをするときにアメリカ人はジョークで始めて、日本人は弁解で始める」。これはものすごく言われています。アメリカ人はスピーチの際、ジョークを言ってパツと笑わすんですね。日本人はスピーチというと「いや、私のようなものは、このような場所に出るものじゃございません」(笑)、と言って始めるんです。まじめな顔して「私は、このことに関しちや何にも知りませんが」とか。

4

国語の授業で、級友におすすめの古典作品の紹介文を書く活動を行うことになり、中学生の陽子さんは、『土佐日記』を取り上げることにした。次の文章は、陽子さんが紹介文を書くために集めた資料の一つである。これを読んで、①～④に答えなさい。

舟は太平洋の荒波にもまれ、夜になると西も東もわからず、人々は舟底に頭をこすりつけて泣きに泣いた。聞こえてくるのは水夫たちのうたう舟歌。

春の野にてぞ 音をば泣く 若薄に 手切る切る 摘んだる

菜を 親やまぼるらむ 姑や食ふらむ かへらや

春の野原で泣いてしまふよ。薄に手を切られながら摘んだ菜を、親がむさぼるんだか、姑が食うんだか。……もう帰る。

暗い船内にふと笑いがもれて、筆者も「心はすこし風ぎぬ」とか。

『土佐日記』には、名もなく、文字を知らない者たちの声が多く書き留められている。こんな舟歌も本来は海風に消えていただろうが、どこかの物好きが書き留めたために、私たちは千年以上前ののんきな歌を知ることができる。舟歌などの労働歌は古今東西に見られ、労働のつらさを忘れるため、または労働の手順を歌で伝えるために生まれたもので、これをわざと書き留めた物好きとは、紀貫之。言わずとされた『古今和歌集』の編者の一人で、「仮名序」の執筆も担当した一流の歌人。すでに還暦を迎えた貫之にとつて、雅びな歌ばかりが歌ではなかった。嵐にも動じないでのんびりと歌う水夫たちの様子、場違いな歌詞のおかしみ、それでもどこか海に生きる男たちの哀切もあり、場面に深みを与える。すべて貫之の計算だ。

「男もする日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」

このような書き出しで始まる『土佐日記』は、紀貫之が赴任地の土佐から都へ帰る旅の記録。「男もする」という日記」というのは、男性官人が備忘録もしくは子孫に残す記録として日々漢文で記したもので、淡々とした事実だけがつらねられた味気のないもの。今残された当時の貴族たちの日記を見ても、歴史研究で一旗あげようという野望がない限り読むにはつらい。一方、『土佐日記』はほとんどが仮名で書かれしかも歌が満載、悲しみやつらさ、喜びやおかしさなど、個人的な感情をすべてさらけだし、一編にひとつのまとまりがある。普通の日記が味気ないものだとしたら、『土佐日記』には味気がある。その「味」のもとには、「女の私としてみよう」という、貫之の女装にある。

漢字は「真名」といわれ、公的文書もすべて漢字で記されていたが、「仮名」は字の通り「仮の文字」であり、公然と男が使うべきものではなかった。「女文字」「女手」とも言われるのは、女性が開発したためではなく、そのやわらかな曲線の印象、そして主に女性が使うものだったためで、「竹取物語」など仮名で書かれた「物語」もまた、女性や子供たちの慰みとして存在していた。貫之は女装をしない限り、堂々と仮名で日記は書けない——そんな時代だったのである。

(出典 佐々木和歌子「やさしい古典案内」)

① 「いらつしゃいます」とあるが、「いらつしゃる」を用いて敬意を表す文に書き改めることができないのは、(1)～(4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) 文化祭の劇の練習で先生が教室に来る。
- (2) 先生が木曜日から出張で県外に行く。
- (3) 先生は明日の球技大会の準備で校庭にいる。
- (4) 先日の実験のレポートを先生にみてもらう。

② 「まじめな……とか」の発言を、話し言葉の特徴の観点から説明した次の文の□□に入れるのに適当な漢字二字の熟語を書きなさい。

聞き手に意味が分かる範囲で文末や助詞が□□されている。

③ 「司会」の役割をしている人物のこの場面での発言について説明したものと最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) 発表者に即した質問をしてそれぞれの意見を聞き出している。
- (2) 発表者へ質問をする際に自分の意見をそれとなく含めている。
- (3) 発表者を刺激するような感情的なことをばを覚えて用いている。
- (4) 発表者の発言した内容をきちんと要約して聴衆に伝えている。

④ 「心はすこし風ぎぬ」は、『土佐日記』の一節「人の笑ふを聞きて、海は荒るれども、心はすこし風ぎぬ。」から引用されたものである。これは「筆者」である貫之のどのような気持ちを表しているか。それを説明したものと最も適当なのは、(1)～(4)のうちではどれですか。一つ答えなさい。

- (1) 水夫たちの舟歌に対して発せられた笑いをよそに、海が荒れていることに心は少しも落ち着かなかった。
- (2) 水夫たちの舟歌に対して発せられた笑いを聞いて、海が荒れているとはいえない心が少し穏やかになった。
- (3) 水夫たちの舟歌に対して発せられた笑いのせいで、海が荒れているのと同じく心が少々ざわついた。
- (4) 水夫たちの舟歌に対して発せられた笑いと裏腹に、海が荒れている事実にも少しずつ沈んでいった。

⑤ 「貫之に……なかった」とあるが、この文章の筆者は、貫之のどのような行為からこのように述べているか。それを説明した次の文の□□に入れるのに適当なことを、文章中から八字で抜き出して書きなさい。

本来、現代まで残らないであろう□□を書き留めた行為。

⑥ 「女もしてみむ」の現代語訳に当たる部分を文章中から抜き出して書きなさい。

④ 次は、陽子さんが作成した紹介文である。□□の部分に入れるのに適当な内容を、条件に従って百字以内で書きなさい。

条件 1 文章中の……の部分以降の内容をもとに、『土佐日記』の特徴を明らかにするように書くこと。

2 文の数はいくつでもよいが、最後は句点で終わること。

「土佐」は、現在の高知県のことです。平安時代前期、作者の紀貫之が、土佐での役職の任期を終え、帰京するまでの五十五日間の船旅を日記として書いたのが、『土佐日記』です。

当時、男性が書く日記は漢文で記されていて、淡々とした事実だけが書き連ねられていました。それに対して、貫之の『土佐日記』は、□□ 男性である貫之が、このような書き方をしたことは、私が特におもしろいと思った点です。

貫之は、和歌に才能を発揮し、天皇の命令で『古今和歌集』を編さんした人です。『土佐日記』と『古今和歌集』を読むと、貫之の仮名に対する強い情熱が感じられる気がします。みなさんに、ぜひ一度手に取ってみてもらいたいです。

受番	検号
(算用数字)	
志願校	

解答用紙

※

注意 字数が指定されている設問では、「」や「。」も「」ます使いなさい。

1

①
ウ

②

②

③

④

北斎の版画は、

とくことよ。

⑤

⑥

2

①
①

②

③

③

④

⑤

次々古本を読む中で、

を実感している。

⑥

この文章は視点が固定された小説であるから、

という特徴がある。

3

①

②

③

4

①

②

③

④

貫之の『土佐日記』は、